

学習症の心理教育的アセスメントに利用可能な検査

CARD : 包括的領域別読み能力検査 (Comprehensive Assessment of Reading Domains)¹⁾

読みの過程は文字・単語レベル(下位プロセス)、文章レベルの処理(上位プロセス)と、それらに影響する語彙能力から構成されるとする理論モデルに基づいて作成された読み能力検査。語彙の質と量、単語をまとまりとして認識する能力、デコーディング能力、音韻認識能力、文レベルの読み速度(単語意味理解に焦点)、文レベルの読み速度(文法処理に焦点)、読解(関係性の理解、心情の理解)を測定する7つの下位検査から構成される。

各下位検査の評価点(読解については関係理解と心情理解の2つの評価点)に加え、語彙指数、プロセス指数(下位プロセス、上位プロセス)、ドメイン指数(音韻経路、単語の活性化、統語、読解)の7つの標準得点を算出できる。

ELC : 読み書き困難児のための音読・音韻処理能力簡易スクリーニング検査 (Easy Literacy Check)²⁾

読み書きの習得期における音韻意識、デコーディング能力の簡易チェックの目的で開発された検査。短文音読課題、音韻操作課題、単語・非単語音読課題の3つの課題から構成される。

標準化データの学年別平均値と標準域(±1標準偏差)が示され、得点が標準域を下回る場合、反応時間が標準域より長い場合、読みに問題があると解釈する。

GATB : 厚生労働省編 一般職業適性検査 (General Aptitude Test Battery)³⁾

仕事を遂行するうえで必要とされる9種の能力「適性能」を測定することにより、望ましい職業選択を行うための情報を提供することを目的とする検査。さまざまな業務や具体的な職業と適性能の関連性も示されていることから、結果を中学生、高校生、大学生の進路指導や、職業相談機関での相談、指導に用いることができる。

11の下位検査の結果を組み合わせることで、知的能力、言語能力、数理能力、書記的知覚、空間判断力、形態知覚、運動共応、指先の器用さ、手腕の器用さを評価する。問題の難易度を次第に上げて最大能力を測定するのではなく、比較的簡単な問題について制限時間内にどれだけできたかを評価する速度検査である。中学生、高校生を対象に標準化されていて高校生以上の対象者の場合、高校生のデータから作成された換算表を用いる。大学生や成人の検査データによる基準値も示されているが、高校生以上の年齢段階間の平均値の差が小さいことから、高校生の基準値を利用可能としている。

各下位検査と適性能について標準得点を算出するが、平均100、標準偏差が20というやや特殊な得点を用いる。

J.COSS : 日本語理解テスト (日本女子大学式日本語版統語と意味の理解テスト : JWU, Japanese Test for Comprehension of Syntax and Semantics)⁴⁾

日本語理解に困難を示す対象児・者の言語能力を評価することを目的に開発された検査。聴覚提示もしくは視覚提示された文の意味を表す絵を選択させることで、文法要素に焦点を当てた文理解能力を測定する。20の文法要素を含む文を各4文、計80問。文を構成する単語の意味が理解できているかどうかを確認するための語彙理解問題もある。

年齢群別の通過率データを基準に、何歳（何学年）相当の理解力かを評価できる。

KABC-II 習得尺度 : 日本版KABC-II (Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition)⁵⁾

原版では初版から第2版に改訂される際に習得尺度が削除され、カウフマン個別式学力検査 (Kaufman Test of Educational Achievement: KTEA) を利用するようになった。国内ではKTEAを翻訳するのではなく、KABC-IIの中で習得尺度を充実させることで学力検査の役割を果たせるようにした。認知尺度と同じ標準化サンプルを用いているため、学力と認知機能を同じ基準で評価し対比させることができる国内唯一の検査バッテリーである。

語彙尺度 (表現語彙, なぞなぞ, 理解語彙), 読み尺度 (ことばの読み, 文の理解), 書き尺度 (ことばの書き, 文の構成), 算数尺度 (数的推論, 計算) の4下位尺度, 9下位検査から構成されている。各下位検査と下位尺度で標準得点を算出することができる。また、最新の知能モデルであるCHCモデルに基づいた指標である、「結晶性能力」「量的知識」「読み書き」の3つの標準得点を算出することもできる。

LCSA : 学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール (LC scale for School Age children)⁶⁾

小学生の言語スキルの特徴を明らかにすることを目的として開発された検査。言語・コミュニケーション能力、具体的には文や文章の聴覚的理解、語彙や定型句の知識、発話表現、柔軟性 (語の想起, 原因の推論)、リテラシー (読字, 読解) を測定することができる。検査は、口頭指示の理解、聞き取りによる文脈の理解、音読、文章の読解、語彙知識、慣用句・心的語彙、文表現、対人文脈、柔軟性、音韻意識の10の下位検査から構成される。各下位検査の標準得点に加え、これらを組み合わせることでLCSA指数 (全下位検査) とリテラシー指数 (読みに関する3つの下位検査) を算出することができる。

LDI-R : LD判断のための調査票 (Learning Disabilities Inventory - Revised)⁷⁾

文部科学省の学習障害の定義に含まれる「聞く、話す、読む、書く、計算するまたは推論する能力」の習得と使用に関する困難を評価し、学習障害に関する教育的判断や診断の資料を提供するために作成された他者評価型検査。学習スキルの6領域に加え、行動 (落ち着きのなさ, 注意力の問題, 衝動性), 社会性 (集団行動, 対人葛藤場面行動, 社交性) の尺度もある。また、中学生用に数学、英語の尺度もある。得点は3段階で評価され、50パーセント以上75パーセント未満を「つまずきの疑い」、75パーセント以上を「つまずきあり」とする。

LD-SKAIP : Learning Differences Screening Kit for Academic Intervention Program⁸⁾

発達障害のある子どものニーズに気づき、聴覚や視覚機能領域の専門的な援助介入の必要性を判断するため、また、認知機能と学習上のつまずきとの関係を把握し、支援の指針と方策を明らかにするためのアセスメントツール。アセスメントにiPadを用いることが特徴的で、学校教員が実施することを想定している。日本LD学会が開発した。

検査は3つのステップから構成されている。ステップⅠは、言語・聴覚、視覚・運動、教科学習の状態についての教師評価型質問紙。ステップⅡは、基礎学習スキル（読字、書字、計算）、音韻意識課題、RAN（Rapid Automatized Naming）課題、視覚認知課題から構成されている。ステップⅢは、国語と算数の教科学習に近い課題として読み（文章音読と読解課題）、書き（作文）、算数（数概念、数と計算、量と測定、図形、数量関係）から構成されている。

ステップⅠでは専門的な精査の必要性が3段階で評価される。ステップⅡについては標準得点が算出される。ステップⅢの読み書きについては、評価項目が定められていて、それぞれつまずき有り・無しの評価ができる。算数では領域別の正答率とつまずきの程度を3段階で評価することができる。

MIM-PM : 多層指導モデルMIM「読みのアセスメント・指導パッケージ」 (Multilayer Instruction Model-Progress Monitoring)⁹⁾

かな文字における特殊表記（拗音、促音など）の習得に焦点を当て、アセスメントと指導法がパッケージ化された多層指導モデルMIM（Multilayer Instruction Model）におけるアセスメント・ツール。独立した検査として利用することを想定して開発されたものではなく、検査結果を支援に活かし、支援効果を継続的に評価するためのツールである。支援と評価のパッケージとして有効性のエビデンスが示されており、教育実践の報告も多数みられる。

ひらがな、カタカナ単語の黙読（正しい表記の選択）、単語の区切りの認識の2つの課題から構成される。特に特殊表記（拗音、促音）の読みに焦点を当てている。

読み能力に応じて3段階に分けられた群における標準得点と対象児の得点を比較して評価する。

NRT : 教研式標準学力検査 NRT (Norm Referenced Test)¹⁰⁾

教科の学習成果について、同学年の基準集団の中の位置から評価することができる検査。小学校1年から中学校3年までの国語、社会、算数・数学、理科、英語について学習指導要領に示された学習内容を網羅する形で構成されている。結果は教科ごとの偏差値、5段階または3段階の評定段階が得られる。また、学習の領域別（たとえば国語であれば「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」、算数であれば「数と計算」「図形」「変化と関係」「データの活用」など）の段階評定も得られる。

PVT-R : 絵画語い発達検査 (Picture Vocabulary Test - Revised)¹¹⁾

語彙の理解力の発達度を短時間に測定する検査。言語的応答が不十分な発達段階でも、聞いた単語について、その単語が意味する図版を指し示すことで解答することができるため、テストに慣れていない幼児や障害のある子どもへの実施もしやすい。語い年齢、標準得点である評価点を算出することができる。

RaWF : 読字・書字課題 (Reading and Writing Fluency task)¹²⁾

大学生年代を対象に、合理的配慮の根拠とすること、また学習症の診断のための資料を提供することを目的に開発された読み書き能力検査。文レベルの意味理解を伴う黙読の速さを測定する黙読課題、音韻処理能力を評価できる音読課題、書字の速度を測定する視写課題から構成される。

それぞれの課題で速さに関する標準得点を算出することができる。また、音読課題、視写課題についてはエラーの量について基準値に沿って評価することができる。

RaWSN : 読み書き支援ニーズ尺度 (Reading and Writing Support Needs scale)¹²⁾

大学生年代を対象に、現在と小学生時代の読み書き困難経験を評価する自己報告型尺度。学習症のある人の手記や事例報告を元に項目が構成されていることから、読み書き困難の背景にある学習症の可能性について評価することができる。RaWFと同じ標準化データを用いて開発されており、実際の読み書きの遅さとの関連から妥当性の根拠が得られている。

現在の状況を評価する尺度では「読字困難」「読解苦手」「書字・書き取り苦手」「聴覚処理の弱さ・不注意」「記憶・学習苦手」の5つの下位尺度、小学生時代の尺度については「文字の視覚処理エラー」「読み書きルール（正書法）学習困難」「読解苦手」「漢字学習困難」「書字困難」「書き取り苦手」「記憶・聴覚的注意の弱さ」「説明苦手」「計算苦手」の9つの下位尺度について得点を算出することができる。標準化データを元に算出された困難度のパーセンタイル値との比較から解釈する。

Reading Test : 教研式読書力診断検査¹³⁾

日本語名は「読書力」であるが、本を読む力ではなく「読みの能力」を測定する検査。「読字力」「語彙力」「文法力」「読解力」の下位テストから構成されている。読書力偏差値、読書力評定段階、読書学年に加え、下位テストごとの評定段階も算出することができる。

読書についての意識や行動をたずねる自己報告型検査である「読書についてのアンケート」もセットになっている。「読書意欲」「読書意義」「読書行動」「読書についての悩み」について、3段階で評価する。

SCTAW : 標準抽象語理解力検査 (The Standardized Comprehension Test of Abstract Words)¹⁴⁾

比較的軽度の言語性意味理解力障害（単語水準において復唱や音読が可能であっても意味を把握することが十分にはできない障害）の検出を目的に作成された検査。聴覚的理解力では、単語を読み上げ、復唱させた後、6枚の絵から単語の意味を表す絵を選択させる。

視覚的理解力については、単語が書かれたカードを提示し音読を求め、その後聴覚的理解と同様に絵を選択させる。標準化データにおける年齢群別の平均正答数と標準偏差が示されており、それとの比較で結果を評価する。

STRAW-R：改訂版 標準読み書きスクリーニング検査—正確性と流暢性の評価— (Standardized Test for Assessing the Reading and Writing (Spelling) Attainment of Japanese Children and Adolescents: Accuracy and Fluency)¹⁵⁾

発達性ディスレクシアのスクリーニングを目的に開発された検査。音読の流暢性（ひらがなとカタカナそれぞれ単語問題と非語問題，文章），音読と書取（聴写）の正確性（漢字音読，ひらがな・カタカナ1文字，ひらがな・カタカナ・漢字単語の音読と聴写），RAN課題，計算（加減乗除）から構成されている。

基準値として標準化データにおける平均値と1, 1.5, 2標準偏差遅い値（流暢性指標）と低い値（正確性指標）が示されている。1.5標準偏差を「何らかの問題」，2標準偏差を「明らかな異常値」としている。

URAWSS II：小中学生の読み書きの理解 (Understanding Reading and Writing Skills of Schoolchildren)¹⁶⁾

書き課題，読み課題があり，実施時間は約20分。書き課題では文章を書き写す。読み課題では文章を黙読し，文章の内容に関する質問に解答する。介入課題として，読み課題，書き課題と同様の課題が準備されており，ワープロの使用，課題用紙の拡大，音声読み上げなどによって読み書きが改善するか評価することができる。

読み書きの速度が標準化データの平均値に比べ，1～1.5標準偏差遅い場合「要観察」，1.5標準偏差以上遅い場合「要精査」と解釈する。

WAVES：見る力を育てるビジョン・アセスメント (Wide-range Assessment of Vision-related Essential Skills)¹⁷⁾

読み書き困難とも関係する視覚関連基礎スキル（目と手の協応，眼球運動，視覚的注意，形態知覚・形態認知，空間知覚・空間認知，視覚性記憶，図形構成）を測定する検査。9つの基本検査と1つの補助検査から構成されている。視覚指数，目と手の協応全般指数，目と手の協応正確性指数，視知覚+目と手の協応指数（3つの指数を合わせた指数）を算出することができる。視覚関連基礎スキルを育てるための教材である，「はじめてのトレーニングドリル」も準備されている。

実践ガイドライン：特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン¹⁸⁾

特異的読字障害と特異的算数障害の診断・治療ガイドラインの一部として作成された検査。読み検査課題は単音連続読み検査，単語速読検査，単文音読検査から構成されている。標準化データにおける読み時間，誤りの個数の平均値と標準偏差が示されていて，平均値+2標準偏差のものが2種類以上ある場合を異常，+1.5標準偏差以上のものが2種類以上ある場合を経過観察としている。読み書きに関する症状チェック表もある。

算数に関しては、算数障害の症状評価のための課題（数字の読み、数的事実の知識、筆算手続きの知識）と算数思考課題があり、前者については正答率と解答時間の、後者については正答率の平均値と標準偏差が示されている。

（高橋知音）

引用文献

- 1) 玉井浩（監修）、奥村智人ほか。CARD 包括的領域別読み能力検査。ウィードプランニング；2014。
- 2) 加藤醇子ほか。ELC: Easy Literacy Check—読み書き困難児のための音読・音韻処理能力簡易スクリーニング検査。図書文化社；2016。
- 3) 厚生労働省職業安定局。厚生労働省編。一般職業適性検査手引、改訂2版。一般社団法人雇用問題研究会；2013。
- 4) J.Coss 研究会ほか。J.COSS 日本語理解テスト—JWU, Japanese test for Comprehension of Syntax and Semantics。風間書房；2010。
- 5) Kaufman AS ほか。日本版 KABC-II。丸善；2013。
- 6) 大伴潔ほか（編著）。LCSA—学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール。学苑社；2012。
- 7) 上野一彦ほか。LDI-R—LD 判断のための調査票。日本文化科学社；2008。
- 8) 一般社団法人日本 LD 学会。LD-SKAIP。一般社団法人日本 LD 学会；2018。
- 9) 海津亜希子、平木こゆみ。多層指導モデル MIM 読みのアセスメント・指導パッケージ—つまずきのある読みを流暢な読みへ。学研教育みらい；2010。
- 10) 石田恒好ほか。教研式標準学力検査 NRT。図書文化社；2021。
- 11) 上野一彦ほか。PVT-R 絵画語い発達検査。日本文化科学社；2008。
- 12) 高橋知音、三谷絵音。読み書き困難の支援につなげる大学生の読字・書字アセスメント—読字・書字課題 RaWF と読み書き支援ニーズ尺度 RaWSN。金子書房；2022。
- 13) 福沢周亮、平山祐一郎。Reading-Test—読書力診断検査。図書文化社；2018。
- 14) 春原則子ほか。標準抽象語理解力検査—The standardized comprehension test of abstract words。インテルナ出版；2002。
- 15) 宇野彰ほか。改訂版 標準読み書きスクリーニング検査—正確性と流暢性の評価。インテルナ出版；2017。
- 16) 河野俊寛ほか。小中学生の読み書きの理解 URAWSS II。atacLab；2017。
- 17) 竹田契一ほか。『見る力』を育てるビジョン・アセスメント WAVES。学研教育みらい；2014。
- 18) 特異的発達障害の臨床診断と治療指針作成に関する研究チームほか（編）。特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン：わかりやすい診断手順と支援の実際。診断と治療社；2010。